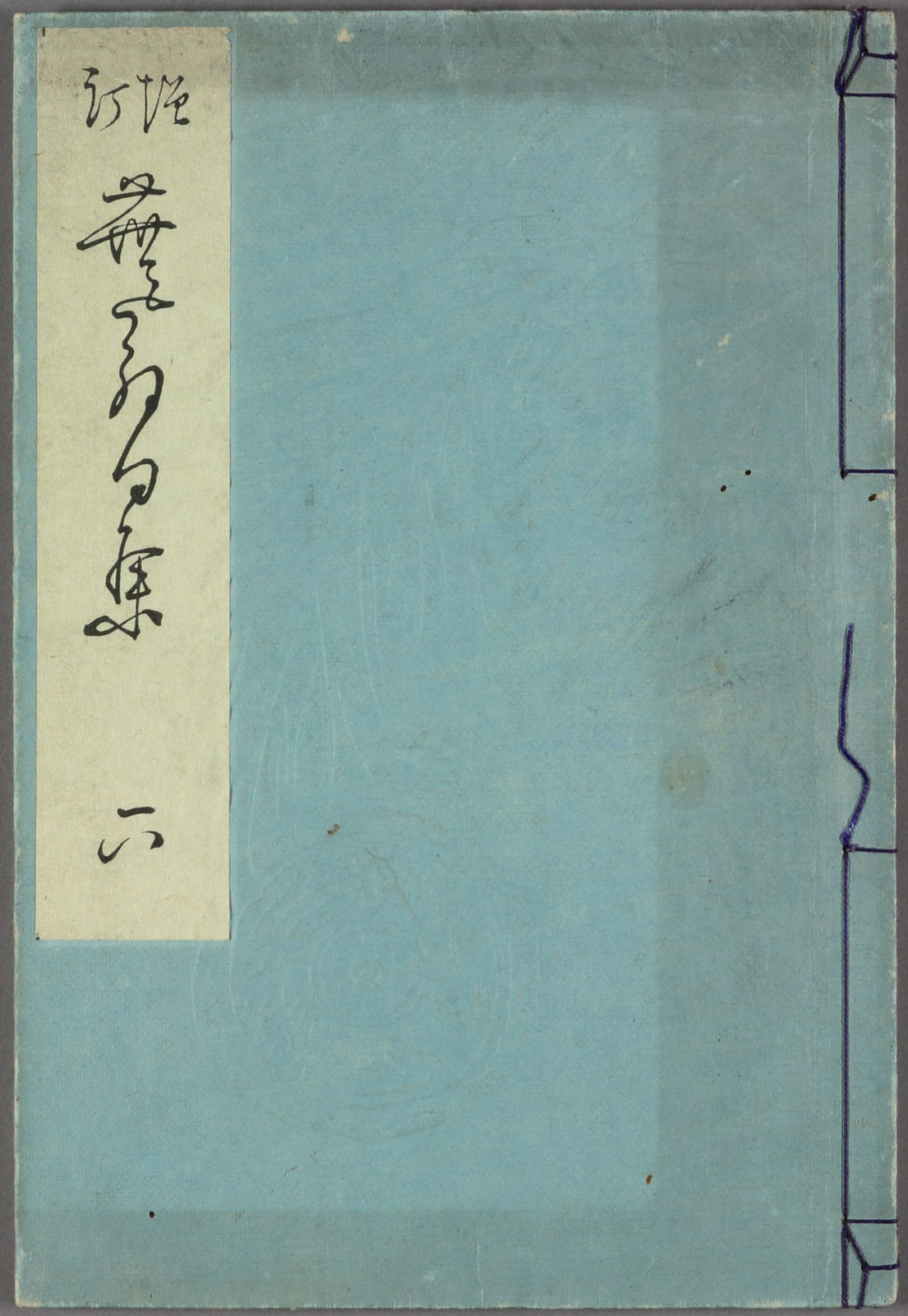
拾遺
萬葉集
六

澄清堂

蕪城白集卷之下

九董著

杜工部

杜子美の合葬を哭す　哭の字

杜子美の行ふ所の詩所

貧交を追ふ杜子の杜

杜子美の草堂香を施藥院

杜子美の所作の詩の脩辭のこと

杜子美の閑窓のもとに指を

屈して毒蛇を笑ふ

杜子美のもとにしたがひ雲をしたがふ

高さ五尺
雪あに心き糸の潔きうるはしよ
除あすよ咲うくれさ変す人の世
うと心く考きおあきとうるくの
咲きうるはうくや然の氣変さ矣ふ
とうくるるとなり

るゆ絶滅ふんとふ所あまうひ

七夕

梶の葉を朗詠集の三行ふ
心つきなく秋の京も白きより
仕と入やさるくうなふ梶をぬ
あちきあや物思乃袂沼祝ふ
調ん梶をたとけきれ社ふ

十六日の夕かなる乃
ちうくあうふ

大方合やあうの空もたなら

根阿弥の百番記やたみを
接待きさ所ひれて西へり

英一蝶画賛

四十くう月雲ふ所おうふ
ゆうくと天の時所て踏ふ
岸乃さとひ合せてたうふ

ふの庵にて

いふ書やハたけてきうく掛
いなの書乃一種ふやせのみ

いなのつゆや望月角の雪はえ
稲まゝあるゝ音や竹の霜

春秋に白をとられて

日こゝろ中ゝて船あるゝ
花入の力者あやゝ角力
茶湯や僧の角力ちりに
負角力を高のゝ

おもり柳のもゝにて

柳散ぬの洞　石慶

柳ちり
よゝ毋まゝ下さつゝくゝ
あさゝもあさゝ

女ゝ
きしをミなゝもはおし
ゝ

秋ふゝ
ゝ
ゝ
ゝ

小柳のゝ
ゝ
出暮て
ゝ
里
ゝ
ゝ

北
ゝ

猪の露おちてをみ原
白萩を春ワちとるちまき門
垣ぎ潜る花ひとも芙蓉かな
さちもつもてある花をお仏堂

間水法めぬ壁

鶯やー輪開き閑のうち
鶯や高の木の梢をうち
秋の蘭香ちらすやむ白
蘭夕孤の花一奇摘と住む

鶯ちらの
鶯ちらちらちらし鶯ちる夕べ
作りちる仏前おとをつれ

辨慧賛

花をちひとり秋なひ茂髪
ちらちらやさら男の脳をぬる
ものぬれ雲ちらもり　弱うち

妙義山

立ちちる一里眉をは私の峰
白雲や秋の刺ひとつ
結金の雲ちあり法華
京人のあちちら雲の中

月は志ゐや桂川の
すまるとハ清かるらん

為すもしや桂川の澄めるとは
為にしむや亡妻の稚と国く路
鈴虫やすゝ哀さもめ契の為
菖の根葉ゆけ新宿を
高山れて言ふくいとてさ
菖のもふのうみ良なる 明月
鈴虫やうゝすもゆうの手樣
鈴虫や村中新の市の音
鈴虫や抗ふ音てゝたり

ほきゝ初み
葉ハ初のる木槿ハ槿花一日葉
とて朝を咲てゆふ花ハ朝む
ゆへはうきまし物ゆ物とつゝ
うり 俗像のたの引ゆる俗名

義やせを
名月東と京淀と角くるまゝ
時ゝ雨

あの横てもゆ手きゝの舟
もゆせを淀の生業乃名月哉
ハ朝や雨ゆるまゝハ二日 月
初ゆゝ追ての名ふ角
とのせを郎

れ一筋月よゝ清す 桂河
中寒のゝ二ゝ清き 鈴ゝ
むゝ 信や河角ひのふてちん
みのゆゝや秋ひるとゆるまゝ

蠶てう葉ゆ〜きたさこそ
小百姓 翁をれ花とふりさけ
思ひ竹や 清水乃女の生写し
日ハ御国風の清さとんなる
良秋とふくもなくさ
訪ふるくもふりれを
中〜ひとりあれいそ月を友
名月さ哀のこゝ拾ふる部ゆ
夕の闇の弘ゆも通る月ゑ家

月天心
持月里天心処なり 江のまん
中のさきり 天心ハあるゝ〜き月
更〜とありてハ俗語なり

月天心 窓ゆ〜きを町を通ゆ
忠則 墳一村乃松に倚竹
月ゑ青松ゆ〜ゆ〜ゆ
名月や乃を海ゆ〜ゆ〜
名月やさゆ北ゆ海方の海
探幽 面月
秋〜ゆ笠ゆ〜ゆ面の月
月ゑ青ゆ〜ゆ
伸九の魂ゆ〜ゆ月

若月や老い人住める峰の茶屋
山の端や海を離るる月もなし
危の月主ともとへて年経る
うきくの花ハ冨士ハ月の月
雉も鳴る嵐や嵐嵐哉
玉山のすさんだまんと云ふこと
其付そをを銀中を立て
身ハ花ハなみくの砕くるの玉
花ハ散るくるふれ月

面のいのうの乃ふもとおひて
名月や井泉花の魚躍る
探訪雁宇
一行の乃や探みて序を訪
紅の花ともうす探をの乃ひと
面中の庵とふ訪を探て
雨乃涼迄ゝ行ゝハ角をうう
涼をし角も乃庵ふ探事
涼帰てをを木末あれよう

菜畠の雲雀ハ鳴し麻ばかり
三笠帰て咲そめぬ鹿の色

残照雲歌

廉ふる山影明く入日哉
ある山もへ麻ばかりなる
菜を刈ば残る稲すくら
わからてあたを雪ふる
初日をおりしめて

麻のおりゝ坊主ハ角なるゝ

あ
あく門ちゝ竹ばの秀

老懐

古きものゝ
又母のおとのみおもふ秋のくれ
あちらむきゝ略も立ゝ秋の暮

秋九月廿日

秋ぐてゝ秋をまもるや秋の音
門ちとられゝ秋も行人秋のくれ
弓ゝ社ゝ立ゝられゝ秋の暮

去来さう
去来の風 問ふ者なし一人也

去来去年移りぬいく秋を
古人移竹をあはれ

故人を別る

本名屋りてさとらん秋しぐれ
あかつきや狗の尖に秋の風
秋の風書むせまを成てうり
金屏の羅ハ誰カあきのうせ
秋風やそ魚うけるる浜庇

あの白ほるらさま〻移れ嶮嶮よ
ト展せる秋 去移の二字のさ
らきよ楽さつけ爲

脇

四十ようみそてをんあを
めやをれ

あるふるてあるふ脇ものを
人の世てを展をたるの春
秋定てかく尾めるる事山の事

武者孫賛

中西孫てたのまれ自のかしか

姓名は何　すう号は華山なり
三輪の田ゝ陰を居るかゝり
山路や波の音　夜の音
七理ゝ分けゝ蔦
そて我ゝ口行をとゝめ
ゝるたえゆゝさゝられを
秋ゝも乃ゝたゝて山雲なり
小窓て雨聴するきゝゝなり
故ゝや西はあくとゝそ花

三径の
蕭翁とふ人三径を分きて
松菓牛を植ゝうその故るを
用ゝく我ものゝ仕きなゝう

主城野ゝ萩更科の菊書いつれ
庭のへやまのゝとられて菊書も
蔵る日のゝゝて深る菊書は差

題白川

黒谷の陣は去りや花のさか
なの作ゝ去ゝたゝと乃冊ゝ
孫つみやたゝの花を見て休む
三径乃十ゝ盃て菊の
甲斐なるや植菊の上を塩車

甲斐の根や
甲州へハ後ろの方地蓮花
さるなり
百日の鯉
ふるくなりつきさるなり

沙魚汐の小舟漕る宗乃前
百日乃鯉切そて　鮒の巨口　玉や　吐
鈍上り　鮒の巨口　玉や　吐
ひとり大原雲かくれの比
久保田晴芝蘭てなさ乃
下葉哀や志のゝ庄れあき秋の
日影をたのみて花ゝ花の咲
水ゆるをとゝにあれ深し
ゝれ夢れあゝめを書き
否を

小ゆる春の青れさと松ひさ
けき毒もとゝかく色々の野おと
山寺や極の老ゆ寂を保
竹屋庄所丹後へ下るに
ゝゝ暗き眠る鴨あの水庄所
暗き立て秋天ひきゝなる寺
ゝゝ乃あゝを世ゝせんする　林
ゝゝ乃ゝゝの機ゝの水ゝ
陸田降て志賀の夕日や江鮭

所迫にゆーや　額白
秋乃暮迄の花美て油さし
秋の姿やゆりて奈良の乃々市
追剥さ子て利り秋の旅
秋面やゆ低の草を踏て原
九山氏ら玉子太と面る
濟せとゆとりれを
井の乃乃眉の吼て秋の秋

甲賀流の
茶大平記ま甲賀流のまを江外
の甲賀山より出るり　ま伊賀甲

甲賀流の志のひの術さ
ま世ま伝ふ所なり

秋上秋の秋を
井の秋やを月を玉の
秋則ま
會催りて
小路りちくゆる
ま
ま近をちちと
秋ま我て作て今ハ又立ま
乃ま井孤ま秋乃ま

門前の
老幼男女の見物あり

秋葉
附の字人形あり
角大師の
牛祭ハ大祭祭ハ　九月十一日
ちりすてるまてこし　又牛祭画巻あり
あとより古画あり　形しあり

多賀の羽多へ五六株ありて花ふり
明神の老僕茅食るみちふり
秋葉ふる我茅屋存ふ
市人のよ屋同じその小ふ
宿借乃二階乃茅屋ふ
三井の山上の三上山
秋葉　茅ち鏑ちくは
角みやのいさ月もの牛家
ちら枯やちきめ足ら法の樹

角文字の所あ　りつ人まろんな
さそふ童子

牛乳乃八十のおそを
おとろくや紅
稲ひて用もひら花の松
廣沢
小ろ花てぬのいつみや塔乃月
山茶花の木ろ花を多塔の月
泊る氣てひとの木のもと
十月のそ宵八三九後九月

十二夜の月を賞する人
我日の本に流れ伝へし
唐人もけふ見てのそ秋月

日てるとも伏水の菊をしらぬ
山路の菊見つゝ行くあらしの風
あらしの前秋ぞとゝ
かゝ白もあらぬ

いつくさを
投壺ハ礼記にありて壺を
さゝの霧安て須乃いのちは
いてたらも投壺まゝ千菊の花

矢をなげて投壺ハ宴会の
ゆハ壺うちと俗名をなくし
京都をの外ちまゝ〜まゝ流
行ものるゆゑ

菊〜左右を霧さ原雲て
白菊や岩山の雪を立の下
手燭して色失へる黄菊か
折百戸菊を門もつゝめか
あさはさ桃の花なる菊畠
菊作り汝ハ菊乃奴この
高雄

西行の
西行の花見と言ふ詩の文句を
〜〜〜放るの井蛙ありとり

西行の乃ぶもいてゝ百菊
ひたち田て花をもりう所々の

谷水の書てはるもみちば
ちらてるる谷沢ちるもみぢば
むらに無今は青人なのうすき

はてるて

笛の音の言て吹もよの秋風たの秋
面白さはかの所ら果やもとゝ
秋〳〵の夢ゝ夕夕ゆめ落〳〵水
元ゝの元の舟ゝ下せ元上川
新米の坂田八ほしもうみの

落葉拾ひ日あるる方あゆきり

山水

拾とゝ拾ゝ拾ゝ拾ゆく〳〵兎ゝ
塑陣ものゝ陣ものゝ拾ゝ拾ゝ
欠〳〵て月もふ〳〵ふる拾ゝ
起て居て〳〵寝ゝ拾ゝ拾ゝ
拾ゝ拾ゝ小冠者ゝ小花
出ゝ拾ゝ拾ゝ通拾の連ゝの拾ゝ
山ゝるの拾ゝ拾ゝる拾ゝ長

子芳の蘭のちるより秋
来る風や酒肴と詩ときふ漁者
秋ハものそなたの仏ふつり
雅者

行住庵に晩霞
旅寝せしを行とて

九月盆の雅さむしの音少む
雅於ふ猫の目の如の夜長
餉

雅弘

餉こそ食やとこかし

傳て蔵め蓄へ番椒
形ちるも心ときし椒もも
椒もよ形や金球とけふ
行きまを言ひ垣根や番椒
雅子乃寺ふつむいてゝ
九月と行ふあふ

芋行や臥と寝れて浮の月
茨茶ハ伏ゝれ形霜ハあられめ
ふ馬さ其ゝあるのたる悲陽

東西
東貢ハ伊冊の人し慶氏とハ
そうゝ屋さ形ゝ　ゆゝ姿寿
ゆゝすゝるてれなり

思ふやう秋酒の中の貧ゝ處ス
栗住侍ふ恵心の仏乃法地弗
みゆゝきまいれたまれて新改玄
あ所方うて
秋の秋五職のゝ人ハ宿ゝ生を
所ゝふを潰めたれめ暮の秋
りゝ秋やゆゝ衣きたる越ト人
法ゆうし所のり方や暮の秋

宿東ゝ多伏庵
ゆて
東ゝ山ゝ所の中もおゝりて

蓑虫の
楠の根を
古傘の
もしめの二句見つけて　そのまゝ他
ゝゝや楠八常盤木なれど太木の根を
すゝ古傘の安ゝもて　鮮なるゝゝ
うゝちまゆゝ花もも

芭蕉部

みのむしのねをうたに初時雨
初たゝみ眉ゝ烏帽子の雪ふり
楠の根を静ゝめらす時雨
時雨ゝや簑笠少の雫ゝ
しるゝゝや宮の口なる琴ゝの上
古傘の安安と月の時雨ふり
ちるゝゝや我も夜ゝの夜ゝいる
時雨　暮ひとみ音ゝ鳴ふ哉

くゝ立尾の山ぬゝて一枝の
冊枝を結ふ時雨哉
十日はゝ花葉新ゝ時雨ふ
やゝてたらゝとおちつたる
ふとたあいれ時雨
炉ゝ雑て久ゝを撥る時雨
初ゝや日和ゝ雨ゝ京ゝれ
居眠て京ゝふゝんゝたゝる里
冬ゝる雑をたゝるのみ倚

空しく勝地をすて俳徒を書とゝめ
紀行をかりて俳諧を書あつめたり
左の山乃麓に住こゝろとし
たる一音庵の主人
梅雪ふるゝ川岸の柳扇子の
いとゝ白ふるゝ門前の雪
たゝひとゝ白い雪のふるゝ
のみしらへやけん禅へや古衣

大兵乃うゝ高あれむ菊間下
布の滝を踏つゝ根ふるゝ
十枚
あ京ゝ行と等もだぶくとゝ
原元おりもるゝ元を
いとゝ多ゝ生る二柳
蓑笠乃衣体作ゝて時雨
白川や犬のうゝ吠る俳の内
秋把の花をもゝ日ゝ

蓑笠の
六祖檀経よりる故ゝ六祖惠能
大師ゝ六物の門三衣二鉢を以ゝ
ゝとす

茶の花や白すもおかうち
茶乃花や石を踏て路を乱
咲乃花もおりてあるを石蕗花

ひとりさふいれて星祭
ふるひ其氏の別墨おひて
星やや山元ちんとなのめさく
星やや小坪下ふらふらふらと
紙ひらきや雪ゆえの文面
孤山や髑髏に面れ作る秋

一茶もとゝ稿のもとに柳見と
いふ題ある長句張と
とりに出懸てのゝ行て
羽織去て涼もさく泉や川ちとり
風やの涼さら月のすゝる小
夜ちとり星をあらておひとり
おもふる居やあるの撰ゆきさ
小ゆや百姓ふらふらと矢取
里ゆて古江は春と乃はゝり

嵯峨遊記

「ぎのわまし嵯峨の新造の都名
負宗」なりさがの桂川を新の名所
ゑとなるを尋ねるなり

紫竹や毋と茎とをふせあし
かな。三尺ばかりの竹を極(きわ)音やいと衛

奈里の庫裏梅を見る

法華堂いさなとれ都名
の梅や市宝の里乃春屋敷
宗任よ北紀乃世を神名月
うら風の和ひてむ
相逢ふ所まて乃ふを
ゆゆしてけ見物よ衛

小春風吉帝も合五月二のふ
ゆの梅ゆの梅ゆゆしの梅ゆ石の上
ゆ舞ゆ舞ゆ仏ゆ仏ゆ拝尾元
きんくの四十九元あり路の宗

老女の夫とあき原の風

小野ゆ原ゆ白ゆ夫梅乃あふめ
ゆ小野ゆ原ゆ白ゆ夫梅乃あふめ
うゆ原ゆ夫ゆ沢ゆ真る猪のもの
原ゆ沢に猪乃を見る女うゆ

小野の山路

秋ゆ世の山路ゆ白ゆ梅
小野とハいゆ世生ゆと云ゆ

[illegible]

岸間に[illegible]大梅の完[illegible]

譜[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

巨[illegible]

[illegible]の書[illegible]巨[illegible]

[illegible]

[illegible]の音[illegible]

[illegible]の僧[illegible]

春氷[illegible]

[illegible]

大[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

息絶ぬよりは石の火とともに消ぬる物なり

金沢寺芭蕉翁墓

我も死て骨を埋む秋の暮

るのの尾ゝいとゝ乃ゝる枯ゝ

蕭然として石に日乃入枯ゝ

大夢の病の復常とゝめる

夜明や病よの起ゝ

待人乃是青ゝ芭蕉葉

菓ゝ黄ゝ雨洗ゝ

古寺の苔あゝ所ゝ

往ゝ来て田をゝる所ゝ

踏葉を拾ひて残ゝ稲ゝ

大ゝ乃ゝ

留る人の見ゝ

ゝとのゝ

ゝ所ゝ

ゝ草庵のゝ成葉ゝ

西ゝ

ゝたる所ゝ

鰒けの宿毒〳〵と絶しいう
ヤけの我 住て居る所之ガ
形見の品の見へハ高らかにつとけ
音ふせて竹くハ浦と鰒しる
所の豚の面世上の人と自眼ム哉
兎角して鰒なき世の友とハむ
袴岩て鰒ばかり居る所人と
童英ハ石ふて信ずき
おのこと共も見ずと出ひて

鰒見の
呉の張輅と云人有へ官るまで
あらしら世の汎れんるをとゝろ形見
のつゝるつゝく 故々の麺の鱠著
菜の見帰りあつすもとて言官に梓
ゝ的ゝ風るなり 呉ゝハ松ほの
鱠ゝゝ名おし本白ら持る此行
不鳥二鱸魚ノ鱠ノ自ラ愛メ名山ヲ入
則中ニ とゝゆゝ

於ゝ此ゝ紀ゝ伊ゝ国ゝ 佛ゝ法ゝ 弘ゝ
法ゝ 法ゝ を ゝ ゝ ゝ れハ
ゝゝゝゝの涙ゝ ゝゝや 取ゝ乃ゝ 鰹
大魚ゝゝ 兵ゝ庫ゝの ゝ 海ゝ 栖ゝ を
九 重ゝゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
とゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
風ゝゝ 鰓ゝゝ ゝ 釣ゝの 魚
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

こがらしや行く世界なる五月雨
風ぬやさの花さて き芭蕉の風
本堂や接く小石を伝あてる
さらしやさらしや岩く碧り水の声

晋子手ヒ同

播盆のみとりや寺乃東
書る前や夏て生る白えり
初雪や清れて人全の露
初雪乃雲とゆた竹の月

雪去ろ〜
馬の糞て通るやしてよ仏馬ふそ
うこせうの書の小ゆとゆとうこほり
上八か歳の字下八時の字あり

題七歩詩

雪乃や雪ち屋く黄金の下
雪の音明ハ月つて啓るよう
うつみ出や数ふれ家も雪の中
いさ雪見　容す　義とふ

湯さして定の小指を雪の人
雪白しかぐの氏人うてうて
雪乃やの世界変れてある
酒ち陸　酒ち歌乃雪と縄

[illegible]室の[illegible]の[illegible]け
[illegible]たのようとまつるめ[illegible]け
[illegible]和[illegible]を[illegible]へ[illegible]
宿[illegible]めぐ[illegible]の雪のふ[illegible]き

凡董[illegible]事より[illegible]さ

雲[illegible]百里舟中さ我月を[illegible]ま
[illegible]人[illegible]碁余の[illegible]を[illegible]
[illegible]て[illegible]と[illegible]山雲さ
[illegible]て在[illegible]として晦翁の

[illegible]
日八日[illegible]八月[illegible]月自の[illegible]
[illegible]佛説[illegible]又荏苒八
月日の[illegible]
[illegible]

山中の
陶弘景八晉代の人[illegible]松風を愛
[illegible]華陽山さ隠居て陶隠居
[illegible]帝[illegible]政の[illegible]
[illegible]時八使者を[illegible]
[illegible]より時の人山中の宰
相と[illegible]

[illegible]代[illegible]
[illegible]
[illegible]雲乃月の嵐ふ

陶弘景賛

山中の相　雪中乃[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

廿ゐや蝶の衣着てあそびけり
若草山へ移し世の名也て残なり
我朋ゆかしき世のさ梅子 以毛繁
きぬぎて朋ゆて床く羽おし
朋中を声にかりの飛脱けり

訛言

白見せや組岩をたたなる姝ヶ許
ろふみをや脱らき世乃風ゆかし
かの蝶乃気まう似にけたる

自ら見せせや
自らせや暁らしむ下部の袖
晋なり句く漢楚軍獣子孝
張良ら故なる「ふとん着て寝たる
すかたや東山　嵐雪か句也
我右ふ
蟠川我右ふ一休禅師の法を信
ある人尋我の地足八画人あるも
武門の人にて一休の画の師く

香まら信く　首さて嵐雪か
俳さ俳ふ
自見せやふとんをきた東山
新左衛門蛇足を床ふ死至ふ
書記典主故園て起ふ夜小
水仙やちきさ都のまくらして
水仙や美人うしをとほし
水仙や賤の女菩花咲め
紅されや小春のある　華畠

蕎麦あれて垂を刈れ海の京
蕎麦咲て花の中を分ける人
ひとり出て小ぶ花野に葉我
易水なかの流るゝ音ちる
皿を鳴嵐は吉乃さむさ

郊外

静かなる夜木らやれの月
をさまる月を庫をはなれう
あの句ハ夢を感セし

同二句

二打ゝ貸屋一軒をうち
きのむら乃人い猿しをまち
聞ゝ美を為てやを未立
浴入て香ゝかるやをこち
時戸を手我あれめ祈叩
一瓢のゝんて商のやれ祈たき
おれしの坊主のをしたたき
ゆふゝのをれハ鶏鶏を祈設

花の表太
京の流具御太夫ら山員廊の
老人ら多くの畸人傳の事

花の表太 雪の男あり 祇門
西会いかゝ 海の里をたゝ 殺
門夫稽古の為に
門夫稽也表 清水京の廊
門夫たゞ和尚も伸そうの自
呈俗をして 海の中 蓉
宿の主と刀掛の主 雪 吹哉
ちゝ 橋をみたる 風糸
秋の魚のえものをたのゝ 海

宋古多ハ
寒苦鳥仏説ゝ

貧居ハ泳

貧ゝ耐ゝ窓を晴ゝ雪の竹
のこゝ多こゝ漢ゝて賜ゝ苦
我の花 業ゝ
我ゝ 水ゝ
水ゝ 乃 沖ゝ 海の
炭 れ ひゝ 夫 橋 並 居
我ゝ 陣 ゝ 沼
歯 鑿 華 乃 氷 嗜

玉あられ

韓信よ食をたべよ――漂母うう
隙の客八西授よ――色――

乾鮭七

俊素堂

祖翁日素堂句蓮とまるよ筵
さきハ一日のあぐく おきるけしきそ
老るゆ琴を分るとる翁庵

一玉ゆきう矢形のそるあられ
玉素漂母の猶をみたれ
古代草屋ゆゆ草屋ゆゆ
山水の減るとと減りて水のな

乾鮭ハ荒ゆ荒ゆ寒うひきあり
のらら魚ゆ腰する市ゆ
このうさぎゆ帯刀ゆ乃高所
諸強帝 乾鮭 自己の吟を彫

鐵骨よふい梅の枝を
宮ゆる風ゆし
ゆゆ梅ゆ決の迷る 鐵より
ゆゆ梅をよ形宮ゆ老う時

感偈

ゆゆ月ゆ門たの寺の天高
ゆゆ月ゆ鐵山石乃あうゆ
寒月ゆ梢木の中乃所之年
ゆゆゆ元徒の群議のるてな

ことさらや蕗の汲み誰か子を

聞にて大きな声や此念佛

極楽の近くハこれ念佛

この振舞也上の町まで来りけり

さきりやいさよひそよ一と梅

几董判白合

飾売市で刀もと鏽しけり

志つしと五位店けり茶館

茶喰隣の亭主　箸持来

妻や子の
他人の宿にハ萩と梅あり
風吹かば衣手さむし
萩の音にかかれる峯の風
衣もなり　西行　浪の音や小貝
まほ萩の声　たも物なり

黄つるの
羅生門あたりみすをつる　手本
おほ白く　春の名同根あくたりね
羅生門　尚白之

くさり借人つ借る家　康ケ谷

妻や子ハ扇息も見て佐茶喰

客僧の陣扇入やまそり哈

春泥をうらおもひして

君運もこよしいはゆるせとし　忘

にごさ木の芽も太きも雑魚扇け

おとろいや小松も捨ぬとも雅

くひもの噛や師走の荻きつ

御経て以てゆうしさと　古暦

年のくれ
雪の空ゝ大きくなるかな

とゝひとう稽るや雪の山所も
ゆくゝまの乃俳田を過るや金の肺
とゝまるや花いたゝくたれう

記省

石公へ五百目かとゝ北とれ
とゝまるや鳥賊の奔鱈乃棒

笠見てつらもやきあう

芭蕉去てのちはまくまたる
無井白集乃美紙

秋半義堂よりへらく爰白集ハ多くて
ありなんやし云ふ名たる人乃其白集
出て日本の色美を減するもの多し
況汎ゝ乃学をやとゝるに門汎ゝ一人の
書物ありてあるうちよ白集を棒ふちり
ゝめむとゝもゝむ義をとゝりゆるさす
義減なよいたゝて二三ゝ之ゝあおけを
あつめて昌くを前後乃二編ゝ撰分ケ
小祥大祥二忌の追福のためとゝも

其志又洗うがごとくにして白雪を
雪に弘めんとするまことにあるかと義乃女意
よはあらず今くに是をもて叶義を謀
へうまといふものを田福吉に

天明四甲辰年十二月

其志ありこの人は世にいとの稀
なりてこの人のみにあらず世にこの
ことわりを知らずいたづらに
かくきのうちのいとはしたなく
やまとうたのみちをおろそかなる
世をなげくあはれなるかな
てこの人の名は世にのこるべし
刷版もよはひ
校訂まことに
うちつけなきにあらざるべし

みちのくにまかりくだりける人の
うへにかきてもとめけるに
きくにおきてもとめ人なくなりぬる
明治三十九年十二月末つかた

級人しるす